

# 齋藤 吉郎(さいとう・きちろう)

## 1、プロフィール

詩人。大正9年、官立弘前高校生の頃から黒石の文芸誌「胎盤」、弘前のパストラル詩集、詩誌「鴉」、「弘前新聞」などに、優れた抒情詩を発表した。

<生没>

1902(明治 35)年9月 15 日～1981(昭和 56)年5月9日

<代表作>

抒情詩「蛾」、「しぐれ」、「断片」(文芸誌「胎盤」、通巻六号)。「古沼」、「断章」(同誌、通巻七号)。

<青森県との関わり>

弘前市出身。県立弘前中学校、官立弘前高校(一回生)で学ぶ。弘前市禅林街「宝積院」に眠る。

## 2、作家解説

明治 35 年9月 15 日、弘前市で父鶴一、母やゑの長男として出生。姉二人、弟妹が八人居た。従弟に、齋藤吉彦(後に、慶応義塾大学文学部助手、同大予科講師、フランス文学者、民俗学者。)が居り、幼少の頃から大変仲が良かった。

大正9年、県立弘前中学校を卒業。翌年、官立弘前高等学校理科(第一回生)に入学した。この年の春から、詩人一戸謙三と文学的親交が始まり、直に、黒石の文芸誌「胎盤」に、詩「蛾」、「しぐれ」、「断片」を発表(通巻六号)。次号には、詩「古沼」、「断章」を発表した。同年、弘前のパストラル詩社主催の文化活動にも取り組んだ。(「マンドリン、ヴィオリン、ツベホーン獨奏会」、長安倶楽部)同 12 年、同詩社第八詩集に、詩「小指」、「小さな詩集に」を、第十詩集(四月号)には、詩「夢」、「瞳」を発表した他、表紙画も担当した。同年に開店した「かくはデパート」(弘前市一番町角)で開催された「西班牙(スペイン)社展覧会」に、油絵(「坂の上の聖教会」)を出品した。同年、「弘前新聞」に発表した詩「猫遊園」の書き出しの部分である。「 — 幸福な人々の涙のみが月夜に青い貝のやうな花々を開かし

める — 月夜である／人々よ蒼白いページを開かう／植込は広い白砂の庭園に  
／月光を吸ひこんで／転がつてゐる海綿の群れ／まん中のこんもりとした繁みの  
下に／親猫の瞳が蛍光を放つてゐる／彼女は疲れはてた天文学者である。「フ  
ランスの詩人ポール・ヴェルレーヌを思わせる詩であり、当時の詩壇に、そのよ  
うな詩は全く存在しなかった。」と一戸謙三が評している。同14年に、官立千葉医科  
大学に進学し、弘前を離れることになったが、詩誌「鴉」(昭和2年)に、詩「乱視の  
嘆き」、「植物の涙」を発表した。

昭和4年、同大を卒業し陸軍軍医となる。この頃から詩作に遠ざかる。旭川、高  
崎での勤務を経て、同13年に関東軍軍医となり、渡満。旧満州国半截河(ハンサ  
イカ)、密山陸軍病院長等を歴任、同21年に帰国。岩手県和賀郡東和町(妻の  
実家)に、齋藤医院を開業。戦後、地域医療の発展に尽力した。同56年5月9日、  
心筋梗塞により死去。

### 3、資料紹介

○文芸誌「胎盤」(通巻七号) ※詩「古沼」掲載

雑誌

1922(大正11)年1月15日

220mm×150mm

詩「古沼」は、官立弘前高校生の頃、藤原譲の筆名で文芸誌「胎盤」(通巻七  
号、大正11年1月15日)に発表した作品である。この号には、詩「断章」の一篇も  
発表した。この他、通巻六号、大正10年12月10日には、詩「しぐれ」、「断片」の  
二篇を発表した。